

騙しと哲学

鈴木 泉

(東京大学大学院人文社会系研究科)

ソフィストと哲学

- ソフィスト (sophist, sophistes)

: 紀元前5～4世紀

プロタゴラス (前494/488-前424/418)

ゴルギアス (前485頃-前375頃)

「私的な議論で戦い金銭を稼ぐ争論家」(プラトン『ソピステス』)

「私が言っているのは、言論で説得できることなのです。法廷においては陪審員たちを、評議会においては評議員たちを、議会においては議員たちを、そして、ポリスの集会であるかぎりの他の集会すべてにおいても、説得できるのです。実際のところ、この力において君は、医者や奴隷にもつことも、体育の教師を奴隷にもつこともできるでしょう。またその実業家も、自分のためではなく、他人のために、つまり語ることによって大衆を説得する力をもつ君のために金銭を稼ぐことが明らかになるでしょう。」(プラトン『ゴルギアス』)

デカルトと「欺く神」(1)

- René Descartes(1596-1650)
『省察』(*Meditationes de prima philosophia*)
(1641)

デカルトと「欺く神」(2)

- 「とはいうものの、或る古くからの意見 (vetus opinio) が、すなわち、何事をもなしうる神が存在していて、この神によって私は、現に実在しているようなものとして、創造されたという意見が、私の精神には刻みつけられている。さてそうであるとすると、神は、大地も天空も延長する事物も形状も大きさも場所も全く何一つ存在しないように、それでいてそれでもそれらすべてが、今私に、たがうことなく実在していると思えるようにしたかも知れないではないか。それどころかまた、私は時折 (interdum)、他の人々が自分ではこの上なく完全に知っていると思いなしているところに関して誤っていると判断することがあるが、あたかもそれと同様に、この私が、二に三を加えたり四角形の辺を数えたり、他に何かいっそう容易なことが仮想 (かんが) えられうるならば、それをしたりするそのたびごとに (quoties)、欺かれ [= 誤り] (fallar) もするように、神はしたかも知れぬではないか。だがおそらく神は、そのように私を瞞こう (decipi) と意志しなかったであろう、というのは、神はこの上なく善であると言われているからである。しかし、常に (semper) 欺かれる [= 誤る] ような、そのようなものとして私を創造したということが神の善性と矛盾するとしたならば、時折は (interdum) 私が欺かれる [= 誤る] ということを許していることもまた、神の善性に関わりのないことであるように思われもしようが、この最後のことはそれでもそうは言われ得ないのである。」(ルネ・デカルト「第一省察」)

デカルトと「欺く神」(3)

- 「私はそこで、真理の源泉たる最善の神がではなくて、或る邪意に満ちた守護霊 (genium aliquem malignum) —この上なく力能があるととも、狡智にたけたその守護霊— がすべてのその才覚を傾けて、私を欺こうとしてかかっている、と想定することにしよう。私は、天空、空気、大地、色、形状、音、ならびに外的なもの的一切が、夢の愚弄より他の何ものでもなく、それらの夢によって私の軽信に守護霊が待ち伏せたと考えることとしよう。私自身を、手をもたぬ、眼をもたぬ、肉をもたぬ、何らかの感覚をもたぬ者、しかしそれらすべてを私がもっていると間違っ
て考えている者、と見なすこととしよう。この省察のうち、身を以てあくまでも踏みとどまり、実際そのようにして、真なる何ものかを認識するということが、いやしくも私の権能の及ばぬところであるとする限りは、だがせめて私のうちにあるこのこと、すなわち、偽なるものに同意することのないように、また、そうした欺瞞者がどれほど力能があろうとも、どれほど狡智にたけていようとも、私に何かを押しつけることのできないように、牢固たる精神をもって心がけることにしよう。」(同)

デカルトと「欺く神」(4)

- 「しかしながら、今も今私の列挙したところのすべてとは別個のもので、それについては疑う事由がそれこそほんの少しもないようなものが、全然ないわけではないかも知れぬではないか。何らかの神 (aliquis Deus) が存在して、あるいはどのような名称でそれを私が呼ぼうとも、そのものが私にこうした思惟そのものを送り込んでいるのではないのか。何故にしかし、そう私は考えようとするのであろうか、多分私自身がそれらの思惟の創作者でありうるというのに。そうであるなら、少なくともこの私は何ものか (aliquid) であるのではないか。しかしながらすでに私は、私が何らかの感覚をもつことを、そして何らかの身体をもつことを否定したのである。私はしかし踏み切れずにいる、いったい何がそこから帰結するのか、と。」
(同「第二省察」)

デカルトと「欺く神」(5)

- 「私は身体や感覚に、それらなしには私がありえないように、そのように繋がれているのであろうか。しかしながら、私を私は、世界のうちには、天空も大地も精神も物体も全く何一つ全然ないと説得して、すっかりその気にさせたが、そうとすれば、また私も存在しないと説得して、すっかりその気にさせた(persuasi)のではないのか。いやいや、何かを私に私が説得して、すっかりその気にさせたのであれば、この私が存在したということは確かである。しかしながら、誰かしら或るこの上なく力能があり、この上なく狡知にたけた欺瞞者(deceptor)がいて、故意に私を常に欺いている。私をこの欺瞞者が欺いているならば、そうとすれば、この私もまた存在していることは、疑うべくもないのであって、欺瞞者は力の限り欺くがよく、しかし決して欺瞞者は、私が何ものか(aliquid)であると私の思惟するであろう間は、私が無であるという事態をしつらえることはないであろう。そうすると、すべてを十分にも十二分にも熟考したということで、それゆえそのきわまるどころ、「我在り、我実在す(Ego sum, ego existo)」というこの言明は、私によって言明され、あるいは精神によって概念されるそのたびごとに、必然的に真であると論定されねばならないのである。」(同「第二省察」)

ニーチェと真偽の問題

- Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900)

「真理とは、それなくしては或る特定の生物種属が生きることのできなくなってしまうような種類の誤謬である。生にとっての価値が結局は決定的なのである。」(『力への意志』493)

真理の探究という思考のドグマ

- Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, 1968, Paris, PUF (『差異と反復』財津理訳、河出文庫、2007年)